



校舎東玄関前のヒヤラギ

クリスマスメッセージ

“Born This Way”



チャブレン 市原 信太郎



クリスマスの物語で、「三人の博士の訪問」に続く箇所には、幼児殺害の記事が記されています（マタイによる福音書2:13-18）。父ヨセフと母マリアがそれぞれに大きな苦悩を背負う中で、ようやくこの世に生を受けたにも関わらず、イエス・キリストは当時のユダヤ王ヘロデによって出生直後から命を狙われることとなります。そして、イエスと両親は主の天使のみ告げによってエジプトに亡命し、この難からは逃れますが、その身代わりは逃れず、多くの子どもたちが命を奪われてしまったことを、聖書は記録しています。

「サバイバーズ・ギルト」を感じながら成長したであろうことを示唆しています。同じ町にいた同世代の子どもも全部が殺される中、自分だけが逃げて生き残った。この事実は彼にとつて、後ろめたさや罪悪感を伴うことでもあったに違いありません。

「Born This Way」とは、キリスト自身がこの不条理さの中に身を置き、わたしたちと同じようにその中で悩み苦しんだということではないでしょうか。わたしたちもまた、わたしたち自身も「Born This Way」を悩みなが自分なりに生きていくようにと、このクリスマスは告げているように思っています。あの人たちは苦しんでいるのにわたしたちはこのうと生きていく、という比較の問題ではなく、「I was born this way」と叫ぶことのできる生命を与えられているというかけがえのない事実をひたすら生きていくようにという声を、クリスマススの物語から聞き取りたいのです。

「Cause God makes no mistakes
I'm on the right track, baby
I was born this way
I was born this way」
（わたしは自分自身のあり方で美しい、神は誤りを犯さないから。わたしはあるべき道を歩んでいる、わたしはこのように生まれたのだから）

レディー・ガガは、周囲との関係の中でなかなか自分の居場所を見いだせず、あちこちにつかりながら青春時代を過ごしたようです。その彼女が、「I'm on the right track, baby I was born this way」と歌っています。神が創られたこの自分にはかけがえのない命が与えられ、進むべき道がちゃんと進んでいるのだ、

と自信を持って叫べるようになるまでには、彼女自身が多量の葛藤を経験してきたに違いありません。そういう経験があるからこそ、彼女は日本の震災だけではなくハイチの大地震などにもいち早く応答したのでしよう。

「Born This Way」とは、キリスト自身がこの不条理さの中に身を置き、わたしたちと同じようにその中で悩み苦しんだということではないでしょうか。わたしたちもまた、わたしたち自身も「Born This Way」を悩みなが自分なりに生きていくようにと、このクリスマスは告げているように思っています。あの人たちは苦しんでいるのにわたしたちはこのうと生きていく、という比較の問題ではなく、「I was born this way」と叫ぶことのできる生命を与えられているというかけがえのない事実をひたすら生きていくようにという声を、クリスマススの物語から聞き取りたいのです。

をするふりをしていた「そうです。また、別の少年は帰宅後、生活できる家があり、そこに家族がいる日常の風景が新鮮に感じられ、今までは違って見えたという事です。そして記者は「彼らの生活がその後、劇的に変わったわけではない。それでも、何かを変えようとして、もがいている。そのことは確かだ。」この震災に限らず、世界の各地ではさまざまな悲劇が起きています。その中であって、わたしたちが今日ここで生きていることは単なる偶然ではありませんが、「後ろめたさ」としてではなく、その生命を大切に生きていきたい。しかしその一方で、震災で被災された方々を含め、多くの人々が苦しみ・悩みの中でクリスマスを迎えなければならぬという現実をも覚悟したいと思えます。

自分にはハーフマラソンの部門に参加したのだが、陸上競技部に所属している自分でも、これ程の距離を走るのは初めてだった。体力的には毎日走っているのになかなか自信があり、ハーフマラソンという未知の距離を走ってみたいと思いついた。ハーフマラソンに参加したのだ。

この府中多摩川マラソン大会は、五キロ、十キロ、ハーフマラソンの三つに分かれていて、歴代の優勝者の中には「瀬古利彦選手」など、とても有名な選手がおり、伝統のある大会なのだ。

ハーフ完走を果たして —高一 府中多摩川マラソン

あった。そして、そんなことを考えているうちに出発の雷管が鳴り響き、一斉にスタートした。

レースの最初は、もともと自分のペースで走る予定だったので周りを気にすることなく自分の走りをした。五キロ地点での折り返しでは、すれ違う立教生と声をかけ合いリラックスして走ることができた。

十五キロ付近で、脚への負担と疲労が酷くなり、走りきれぬかどうかと不安になり始めていたのだが、色々などから聞こえる応援のおかげで、心折れることなく走り続けることができ、ラスト一キロのスピードでは最後の力を振りしぼり、ハーフマラソンを走り抜くことができた。

タイムや順位に関係なく、ハーフマラソンを走り抜くことができたこと、応援の心強さなど自分の人生の良い経験となった。
(高二 白石 浩之)

十字 今月の聖句

恐れていたことが起こった。危惧していたことが襲いかかった。
静けさも、やすらぎも失い、憩うこともできず、わたしはわななく。
(ヨブ記 3:25-26)

すべてを失い、絶望のどん底に置かれたヨブが苦悩の中で吐き出した言葉。しかし、ヨブ記の最後では「ヨブが友人たちのために祈ったとき」神はヨブを祝福し、豊かな恵みを与えられる。

中学一年便り

「慣れ」からの脱却を

校門前の桜がまだ満開だった頃、凛々しい姿で臨んだ入学式を覚えているだろうか。あれから九ヶ月近くが経つ。中学一年生の三分の二が終わった今、自分自身を振り返ってみてほしい。見るもの聞くものすべてが新鮮で無我夢中だった四月。その時の自分と今の自分を比較してみよう。授業や部活動だけでなく体育祭や文化祭等の学校行事において、自分自身を成長させることはできただろうか。前期は学校生活に順応することだけで精一杯だった君たちも、今ではいろいろな意味で「慣れ」が生じてきたように思うが、その「慣れ」は気持ちに安らぎをもたらす一方で、成長の妨げにもなりうることも覚えておいてほしい。

例えば、君たちはお決まりのレストランで食事をすする際に、大好物だからといって毎回同じものばかりを注文してはいないだろうか？ それも選択肢の一つではあるが、中学一年生の君たちには是非ともできる限り毎回違う料理を注文して様々な味を経験してほしい。それがもし自分の口には合わなかったとしても、「その料理が美味しくない」という新たな発見があり自分の成長につながるのだ。この先の学校生活において、君たちが慣れに甘んじることなく幅広い視野を持ち、毎日が新たな発見で満ちあふれたものになることを願っている。もし君の中期までの学校生活がマンネリに陥っているのであれば、このコラムがある種の刺激剤となってくれば幸いである。

(白石 大知)

中学二年便り

クラスの性格

この学年の社会科を担当して一年半以上が過ぎた。二年生になってからの授業の回数は、すでに九十回ほどとなっている。時間にして七五時間。ノートが二(三冊目になるもの納得だ。ボクの社会の授業にも、みんなずいぶん慣れてくれて、授業はやりやすく感じている。ただ、三クラスとも全く同じというわけではなく、それぞれ、クラスの性格がある。人に個性があるのと同じだ。

一組はよく発言が出る。質問をした時にも、話を進めている時にもとにかく意見が出るので、それを活かしながら授業を進めている。的外れな発言の扱いをどうするかと、関係のない私語を無くしていくことが課題のクラスだ。

二組は三クラス中、もっとも予定通りに授業が進む。大方、ノートも書いていて見えてはいるが、授業の進行に目に見えぬ障害はない。が、今ひとつ手応えもない。一人ひとりにボクが伝えたいことが伝わっているか、心配になることがある。

三組はバランスがよい。質問した時の受け答え、聞かすべきタイミングでの集中力はなかなかだ。弱点は全体としての行動が遅いこと。そして個々のだらしないさ、詰めの甘さが挙げられる。あと、教室がコキタナイ。ゴミはゴミ箱に捨てて。各クラス、それぞれ性格がある。集団としての長所は大切に、そして課題は克服しよう。後期にどのようなクラスが成長するのか、今から楽しみだ。

(荻野 朝行)

中学三年便り

アイニティとアイコニシティ

中期のコミュニケーションの授業では、「尊敬する人」という題でエッセイを書き、スピーチを実施した。挙げられた人物は、家族、先輩、先生、芸能人、実業家、運動選手、歴史的偉人、芸術家などで、多様性に富む魅力的なものとなった。

ある人間の存在/言説/軌跡が、今この自分(「現実自己」と何らかの点において結びつき(尊敬の眼差し)、自己の言動や価値観に投影されている(似ている)状態は、類似関係をもっていると考えられる。そうした類似性/類似性/相似性に依拠しながらその人物を指標することで、「私(自己)にとつて遠い(発話の場にはいない)象徴的な「彼/女(他者)であったも、認識/想像/解釈可能なものとして容易に指し示し、擬える(接近/模倣する)ことができる。

ただ、残念ながら、その憧れている「何か」をどんなに真似ようとしても、「彼/女」には、生活世界で「蓄積」(ストック)された歴史的な相違(経験や技能等)があるので、完全にはコピー(同化/複製)し得ないだろう。だから、やがては自分の意志で独自性を探求(創出)していく必要があるのかも知れない。

とは言え、様々な出来事が生起しては瞬時に消えていくこの混沌とした「通過」(フロー)の時代に、一人ひとりが做すべき先達との類似点をテキスト化し、語用行為をしたことは意味のある実践だったにちがいない。「理想自己」に至る途が薄らと浮かび上がったことだろう。

(綾部 保志)

高校一年便り

正名

中国の古典『論語』の中に好きな言葉がある。孔子の「必ずや名を正さんか(必也正名乎)」という言葉だ。「名称がついたら、それにふさわしいことを実行しよう」というのがわかりやすい意味だろうか。

「〇〇」という名称の役割についているかぎり、その名称にふさわしい仕事をしなくてはいけない。「〇〇」という名称の立場にあるかぎり、その名称にふさわしい振る舞いをしなくてはならない。二千年以上前に、孔子がこの言葉を残して以来、長い歴史の中で様々な立場の人が、様々な場面でこのようなことを理想とし、実現を心掛けた。

私たちがどっしりかきと考えていかないとけない言葉だ。

否が応でも、生まれてすぐ「名」を与えられ、学校に行っても、会社に行っても、係・委員会・役職という「名」を与えられる。それは子どもから大人まで、等しく変わらない。知らないうちに「名」にがんじがらめにされている。束縛されているようにだが、あきらめるしかない。

そうであるなら、逆にしっかりと「名」に向き合ってみよう。

今、皆が共通に与えられている「名」は、「高校生」。さあ、この「名」にふさわしいことは何だろうか。

(永田 真一)

高校二年便り

5W1H

一九四一年十二月八日。日本政府は、アジア太平洋戦争を開始した。今からちょうど七十年前の出来事である。

では、「どこで」、「開戦したのか」、「ハワイ、真珠湾」という答えは、日米間の戦争に限定すれば正解である。

しかし、正しくは「マレー半島、コタバル」である。真珠湾攻撃よりも約一時間早く、当時英領であったマレー半島に日本軍は手を伸ばしていたのである。

つまり、アジア太平洋戦争は、英米など連合軍との武力衝突であつただけでなく、東南アジアへの侵略という側面も持ち合わせていた、ということが分かる。どこで、という疑問符を付けることによって、戦争の方向性が見えてきた。

「5W1H」を通して、与えられた知識や情報を見てみると、事象の大きく深い広がりが見え、「分からぬこと」がはつきりとしてくる。そうしたら、次は自分の手で調べてみて欲しい。

「分かった」快感と、「分からぬ」と、うむと考える充足感とは、誰かに与えられて得られるものではないからである。

開戦七十年を迎えて、考えるべきこと、語り合うべきことは少なくないが、まずは、「なぜ」という疑問符を、この文章冒頭の一文にぶつけて欲しいと思う。

最後に、テストと格闘し一生懸命「うむと考える」みんなの姿を見て一句。

リズム踏み
前髪くしゅり
ふう、と解く

(正村 多佳子)

高校三年便り

「出会い」を求めて

先日、小学校の同窓会があった。定期的に会っている友人も多く参加したが、そこで卒業以来約30年ぶりに再会する友人にも会うことができた。お互いの変貌ぶりに苦笑いしつつも、その再会は長い空白を一撃で埋めてくれるものとなった。

君達にも時が経てばきっとこのような機会がやってくるのだろう。今の君達に周囲の仲間達はどうか映っているのだろうか？

仲間には財産というが全くその通りだと思う。

ただ、卒業したらもう二度と会うことのない人もいるかもしれない。いや、いる。寂しい言い回しだがそれが現実だ。

出会いとは本当に不思議なものだ。偶然と偶然がいくつも重なり合つて人は何かに出会う。

思うに、今までの君達の出会いには「与えられた出会い」が多い。だが、これからの出会いは「求めていく出会い」に間違いなく変わっていく。ここでいう出会いは、単に人と人との出会いを指しているのではない。生き甲斐、思想、運命……。まだ出会わぬ未知なる出会いにときめきを持つてほしい。視野を広くし、アンテナを張り巡らせ、そのチャンスを見逃すな。

高校を卒業するまであと三ヶ月となった。君達がこれから出会うであろう仲間は今、自分の人生を賭けて猛勉強をしていることを求めるため、自分達にしかできない貴重な三ヶ月を過ごしてもらいたい。

(古賀 賢之)

陸上競技部 秋の戦績

十月二日より名古屋で行われた全日本ユース選手権(高校一・二年生の全国大会)に高二百石が八〇メートルで出場した。予選を全てで一番良い記録で通過した白石。決勝では前半を二(三番手の好位置につけるも、勝負重視のスローペースからのラスト勝負では必死のスパイトも届かず、四着でのフィニッシュとなった。メダルこそ届かなかったが、自身初となる全国大会入賞であった。



その翌週に駒沢競技場で行われた関東新人大会では同じく八〇メートルに出場。今度は得意とするハイペースで先行すると、必死に食らいつく後続をラスト五十メートルで引き離し、そのまま先頭でフィニッシュ。全国入賞者らしい堂々としたレースで関東初優勝を飾り、よいトラックシーズンの締めくくりとした。

また、十一月三日に行われた東京都高校駅伝では、参加一〇七チーム中、本経過最高順位タイとなる十五位でフィニッシュした。メンバーは区間順に黒崎(高三)・堀内(高一)・齋藤(高三)・青山(高一)・白石(高二)・横山(高三)・大倉(高二)。

(顧問 岸 博克)